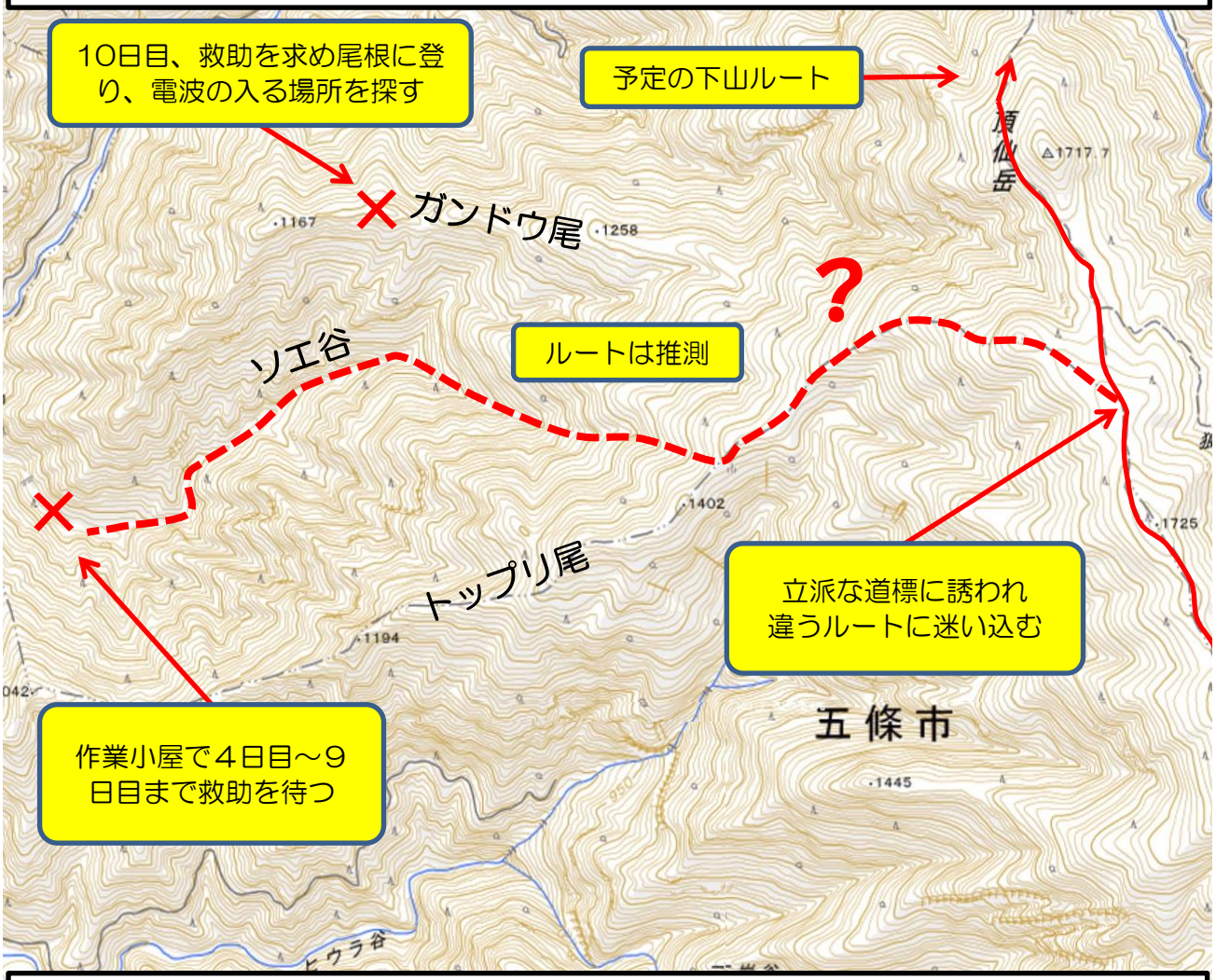
八経ケ岳遭難（2022年11月）

登山歴40年以上のベテラン女性２人。分岐で立派な道標を確認し、下山ルートを決めた。次第に登山道は無くなり沢に迷い込む。なおも進むと砂防ダムが出てきて進むことができない。たまたまあった作業小屋で遭難９日目まで救助を待つ。10日目に救助を求め一人が12時間かけて尾根に登り、やっとの思いで携帯が通じ、翌日、救助された。



解説

道迷いの場所（起点）は、立派な道標。あまりにも立派な道標のため違和感があるも道標どおりに進んでしまった。雨が降りはじめ視界も悪くなるなか、道を見失いながら、次第に谷のほうへ下っていき、戻れなくなる。 なおも進むと砂防ダムを越えることができず、引き返し、作業小屋で9日目まで救助を待つ。10日目、意を決して一人が尾根を登り携帯の電波が届くところまで進みやっと携帯がつながり、翌日救助された。

道の分岐は、コンパスで方向を確認。あるいは、地図アプリで現在地の確認や分岐を過ぎてから5分経過後、もう一度地図アプリで現在位置を確認し、正しいルートを歩いているか確認する癖をつけてほしい。

「臆病になること」、この言葉は道迷い遭難を減少させるキーワードだと思っている。一方で、地図アプリの現在位置を家族にリアルタイムで伝える方法をご存じだろうか？例えば、YAMAPであれば「みまもり機能」、ヤマレコであれば「いまココ」機能を利用してほしい。無料で登山者にここまで寄り添っていただけるアプリは「素晴らしい」の一言。ありがたく使わせていただき、道迷い遭難による死亡事故が減少することを祈ります。